

## 講義 6 : チンパンジーの認知と発達

田中正之 (思考言語分野)

この講義では、チンパンジーの認知能力とその発達的变化についてお話しします。チンパンジーは、現生種の中でヒトともっとも最近まで共通の祖先をもっていた種で、「進化の隣人」とも呼ばれます。道具使用などの物を扱う際に見せる知性や、群れ内での駆け引きなど社会的場面で見せる知性など、さまざまな知性についてご存知の方もいると思います。このような知性は生まれつき備わっているわけではありません。私たちヒトと同様に、神経系や知覚・運動系の発達に伴って現れたり、それらを基盤として学習によって獲得したりするものです。

草食動物のように生れ落ちてすぐに自力で動き出せる動物と違って、霊長類の子どもは生まれてからしばらくは親にしがみついですごします。自力で移動できるようになっても、親のそばにいて何か変わったことがあれば親に保護を求めます。このように親に依存している時期が、チンパンジーでは4、5年間続きます。この期間は、子どもにとって、ただ親に保護してもらっただけではなく、学習の期間としても重要です。親の世代がもつ文化や技術を、熱心に観察し、自分でも試してみることによって獲得していくのです。このようにチンパンジーの認知能力を考えると、彼らの発達と学習のプロセスは不可分の要素だといえるでしょう。

霊長類研究所では2000年から、3人のチンパンジーの赤ん坊を作ることによって、チンパンジーの認知能力と発達過程を調べてきました。それまでのチンパンジーの発達研究では、赤ん坊だけを取り出し、人間の環境の中で育てていく中で研究をおこなってきました。しかし、それでは本来社会の中で育ち、学習していく種であるチンパンジーを十分に調べることができません。この研究では、母親に育てられ、群れの中で育つチンパンジーの発達を調べることを目的として、研究が継続されてきました。そこからさまざまな発見がありました（詳しくは参考文献を参照ください）。

現在、チンパンジーの子どもたちは6歳半から7歳になろうとしています。チンパンジーでは、そろそろ思春期にさしかかり、やがて性成熟を迎え、大人へと成長していきます。最近数年間におこなわれた研究では、子どもたちは、20年以上にわたって認知研究に参加してきた大人たちと変わりなく、実験に参加しています。いくつかの研究では、すでに大人と子どものパフォーマンスに差は見られなくなっています。一部の課題では、子どもの方が大人を追い抜いて優秀な成績を示しています。また他の課題では、大人ではなかなか成績が上がらないのに、子どもでは易々と習得してしまうということも見られました。課題の学習速度や学習可能性についても、年齢や発達の時期による影響があると考えられます。この講義では、これまでの研究の経緯を紹介しながら、チンパンジーの認知研究における発達の影響について、具体的な研究例から説明したいと思います。

参考文献

Matsuzawa, T., Tomonaga, M., Tanaka, M. (eds) (2006) Cognitive development of chimpanzees. Tokyo: Springer.

友永雅己・田中正之・松沢哲郎（編著）（2003） チンパンジーの認知と行動の発達. 京都：京都大学学術出版会.

松沢哲郎（2006） おかあさんになったアイーチンパンジーの親子と文化ー. 講談社学術文庫.